

日 点 委 広 報

日 本 の 点 字

第 6 号

日本点字委員会 1978年12月15日発行

東京都新宿区高田馬場 1-23-4 日本点字図書館内

日本点字委員会事務局

TEL (03) 209-0241

目 次

- I. 会長就任にあたって 本間一夫 - - - - - 2
- II. 日本点字委員会の委員および役員決まる - - - 3
- III. 第12回総会における表記法についての決定事項 - 4
- IV. あと書き - - - - - 5

I. 会長就任にあたって

本間 一夫

前会長肥後基一先生のあとを受けて、はからずも私が日点委会長の地位につくことになった。点字は盲人の教育、福祉あるいは文化の基礎であることをよく知るだけに、責任の重きを感じずにはいられない。しかるに、肥後先生のように点字につき深い学識を持つわけではなく、ただ点字の読み書き50年の経験を基礎に、広く盲人の立場に立ってその研究に努力していきたいと思うばかりである。点字はあくまでも盲人のための文字でなければならぬのである。

従来、日点委の行き方は必ずしも世に正しく評価されてはいなかったように私には思われる。点毎の投書欄などによくそういう意見を見ることがあった。しかしそこにはいささか誤解もあったことを言っておきたい。たとえば、本来の機関誌「日本の点字」等にいくつかの書き方を並べて意見を求めるようなことが多かったが、人々はそれが即決定案のようにとった場合もあったのではなからうか。実際には、日点委の姿勢は非常に慎重であった。何か一つのことを決めるにもずいぶん長い年月、論議がくり返された。小数点の統一しかりであり、句点の使用しかりであった。

多くの盲人は点訳者をも含めて「点字はあまり変えてもらいたくない」という意見を持っている。私も大賛成である。また、もともと目で見える文字と指で探る点字とは大きな違いがあるのだから、点字の世界が現代かなづかいをも含めて墨字の世界に同調しすぎることは避けなければならない、という意見にも私は同感である。

ともあれ点字は決して少数者のものではない。盲界の声なき声を広くくみ上げて論議に載せていかなければならないと私は思うのである。

皆様からさらに活発なご意見・ご批判を期待して、会長就任の弁としたい。

II. 日本点字委員会の 委員および役員決まる

日本点字委員会は1978年11月1, 2両日、箱根の静雲荘において、第12回総会を開催し、第3期委員および役員を次のように決定した。

まず日本盲人社会福祉施設協議会は5月に開かれた総会で盲人社会福祉界代表委員の推せん方につき協議し、日点委総会時までに、石森優(ヘレン・ケラー協会)、岩山光男(名古屋ライトハウスあけの星声の図書館)、下沢仁(日本点字図書館)、高橋実(点字毎日)、西尾正二(カトリック点字図書館)、足田泰男(日本ライトハウス)の6名を代表委員として選出した。また全日本盲学校教育研究会では8月に行われた長崎総会において、盲教育界代表委員として、阿佐博(附属)、池田瑛(兵庫)、越沢洋(岐阜)、小林一弘(附属)、永井昌彦(京都)、宮村健二(石川)の6名を推せんした。

これを受けて、日点委では11月1日、両界代表委員協議会を開催し、学識経験者として、木塚泰弘(特殊教育総合研究所)、肥後基一(東京点字出版社)、本間伊三郎(盲学校長会)、本間一夫(日本点字図書館)、宮田信直(日本ライトハウス)、村谷昌弘(日本盲人会連合)の6名を選出した。

引き続き委員総会において、会長に本間一夫、副会長に阿佐博および本間伊三郎、事務局長に下沢仁、を互選し、向う4年間この会の運営にあたることとなった。なお事務局担当委員として、加藤俊和(京都・一般協力者)、金子昭(平塚盲)、塩谷治(附属)、遠山啓(日点)、藤野克己(神奈川ライトセンター)、渡辺彰(日本ライトハウス)の6名が会長から委員を委嘱された。

Ⅲ. 第12回総会における 点字表記法についての決定事項

第11回総会から継続審議の課題となっていた特殊音点字・その他について、11月1, 2日の第12回総会において、次のように決定した。

1. 特殊音点字

- (1) 「ティ」 ㇿㇿ は ㇿㇿ , 「ティ」 ㇿㇿ は ㇿㇿ , 「トゥ」 ㇿㇿ は ㇿㇿ , 「ドウ」 ㇿㇿ は ㇿㇿ , 「ウ」 ㇿㇿ は ㇿㇿ とそれぞれ書き方を変更する。
- (2) 「改訂・日本点字表記法」に表示する特殊音の数は、従来の27音に「イエ」 ㇿㇿ を加え、28音とする。

【理由】 現行の「ティ」 ㇿㇿ , 「ドウ」 ㇿㇿ は、前置点が外字符と同形であるため、ローマ字と誤認される危険性があった。この「ティ」「ドウ」と関連する現行の「ティ」「トゥ」を合わせて、この4音の書き方をどう改訂するかが当面の課題であった。審議の過程ではいろいろな案が検討されたが（「日本の点字」3, 4, 5号参照）、拗音・特殊音体系をあまりくずさず一貫した体系性を持ち、しかも最低の変更にとどめるよう努力を重ねてきた。今回 ㇿㇿ , ㇿㇿ , ㇿㇿ , ㇿㇿ の表記を決定するにあたってはいろいろと議論はあったけれど、現行の他の特殊音の表記に抵触せず移行過程に混乱がないこと、触読上比較的抵抗が少ないこと、前置点が現行より整理できること、かな文字構成法の体系に位置付けられること、などが重視された根拠である。その結果、特殊音の前置点は ㇿ , ㇿ , ㇿ の3種類に整理されることになる。しかも ㇿ を用いる「テュ」 ㇿㇿ は例外的な存在で、 ㇿ を前置点として用いる特殊音はかな文字表記（墨字）の大文字部分がいずれもイ列・エ列の文字を用いて表記する音に対応し、 ㇿ を前置点として用いる特殊音はかな文字表記の大文字部分がウ列・オ列の文字を用いて表記する音に対応することになった。ただしこれらの前置点に ㇿ を加えてそれぞれ濁音化する特殊音を表記するこれ

までの原則は、そのまま踏襲することとした。なお「ヴ」 $\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{smallmatrix}$ を $\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{smallmatrix}$ と表記することにしたのは、特殊音の内でも小文字の付かない墨字の表記に対応させたもので、拗音・特殊音体系の別枠としたものである。また「イエ」 $\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{smallmatrix}$ を追加したのは、使用頻度が比較的高いためである。

2. 指示符の表記

$\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{smallmatrix}$ ～ $\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{smallmatrix}$ を第1指示符、

$\begin{smallmatrix} \circ & \circ & \circ \\ \circ & \circ & \circ \end{smallmatrix}$ ～ $\begin{smallmatrix} \circ & \circ & \circ \\ \circ & \circ & \circ \end{smallmatrix}$ を第2指示符、

$\begin{smallmatrix} \circ & \circ & \circ \\ \circ & \circ & \circ \end{smallmatrix}$ ～ $\begin{smallmatrix} \circ & \circ & \circ \\ \circ & \circ & \circ \end{smallmatrix}$ を第3指示符とする。

【理由】「日本の点字・第3号」に改正案として示した指示符原案のうち、指示符2、および3は、記号として不安定であり、特に指示符2は実際使用してみると開き記号と閉じ記号とが逆の感じを受ける。そこで、試験問題の下線（アンダーライン）や傍線（サイドライン）にも使用しやすく、触読上も抵抗感の少ない上記の記号を指示符と決定した。なお下線・傍線内にかぎが接するような場合には、第2かぎを使用することによって $\begin{smallmatrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{smallmatrix}$ が続くことを避けることができる。

IV. あ と が き

日点委では、ここ数年にわたり、日本点字表記法の体系化をめぐる精力的にしかも慎重に討論が行われてきた。そしてこの11月に箱根で開催された第12回総会において一応の結論をみるに至った。日本点字委員会が結成され、「日本点字表記法」を刊行した当時から提起されていた10数年来の課題が、ここでひとまず解消されたわけである。

今回の総会では、特殊音点字の表記をどうするかという点にほとんどの時間を費やした。文字の表記を変えるということは、慎重の上にも慎重に行なわなければならないことである。

日点委では「日本点字表記法」の改訂にあたって、これまでずっと同じ姿勢

で検討を続けてきた。しかし一部の者の私意によって左右されているという非難もしばしば耳にした。点字は盲人のための文字であることはもちろんであるが、単に盲人のためだけにあるものではなく、点訳者や晴眼の製版士などにとっても使いやすいものでなければならない。そうした点字使用者の声なき声に耳を傾けながら、必要最少限の改訂にとどめたつもりである。決して安易な検討で改訂作業を行ったのではないことを、ここにもう一度改めて明記しておきたい。

現在日点委では、来春の発行を目指して「改訂・日本点字表記法」の編集作業を進めている。また専門委員会を設けて審議を進めている「点字理化学記号」等の解説書は、財政上の問題もあるので、できるものから順次刊行していく予定である。

なお今回の委員および役員改選にあたり、「日本の点字」の編集担当として、阿佐・加藤・木塚・小林・塩谷の5名があたることになった。

これまで同様のご支援ご協力をたまわるようお願いする次第である。

肥後前会長の死を悼む

日点委前会長肥後基一氏は病氣療養中のところ、12月4日午後3時10分逝去された。氏は大正15年以來、点字書の出版と点字表記法の研究にその生涯をささげられた。その情熱と多大な功績に対し深甚の敬意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈りするものである。